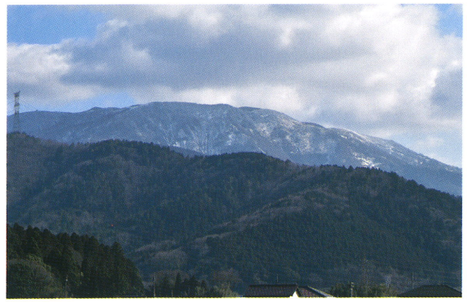
山岳信仰と水のある暮らし



霊仙山

霊仙山は、鈴鹿山脈の最北に位置し、米原市と多賀町にまたがる標高 1094 メートルの山です。石灰岩で覆われた霊仙山の山頂にはドリーネと呼ばれる窪地が複数あり、水が溜まって池となり、竜神信仰や雨乞い行事と深く関わっています。山麓には七湧水を代表とする清水があり、降った雨が霊仙山という神仏の体内を通って湧き出たものといえます。霊仙山そのものを神仏が宿る聖なるものと崇拝し、山頂部の池や山中の滝、断崖、洞窟で修験道の行者（山伏）が厳しい修行を行いました。

地蔵川

居醒の清水を水源とし、中山道醒井宿を静かに流れます。水温は年間を通して 14 度前後と一定。清流でしか生育しないキンポウゲ科の多年草・梅花藻（ばいかも）が繁茂し、初夏から晩夏にかけて梅の花に似た小さな花を咲かせます。また滋賀県から絶滅危惧種の選定を受けている淡水魚・ハリヨが生息していることでも知られています。居醒の清水に程近いところに建つ地蔵堂に祀られている醒井延命地蔵尊が地蔵川の名前の由来といわれます。醒井宿の人々は、この川の水を生活用水として利用してきました。両岸に川端と呼ばれる洗い場が設けられており、食材等を洗ったり、飲料や果物を冷やす天然の冷蔵庫としても利用してきました。

醒井延命地蔵尊

縁起によれば、817 年（弘仁８年）に長期間にわたる大干ばつがあり、天皇の命で伝教大師（最澄）は比叡山の根本中堂に祭壇を作って雨乞いを祈願されました。すると薬師如来が夢に現れ、醒井の清浄な泉へ行くよう告げます。伝教大師が醒井へやってくるとひげを生やした老翁が現れ、「私はこの水の守護神である。ここに地蔵尊を刻んで祀れば雨が降り、草木も生き返るであろう。」と言い、水の中に消えました。大師は早速細工師に地蔵尊を作らせ安置します。法会を開くと大雨が３日間降り続いたということです。

この地蔵は当初川の中に祀られていたため、俗に「尻冷やし地蔵」と呼ばれていました。

醒井の地蔵盆は賑やかで、子どもたちは地蔵尊にお参りすることで霊仙の神仏に守られています。

醒井宿資料館のご案内

旧醒井郵便局局舎

ヴォーリズが設計に携わった木造二階建の擬洋風建築で昭和 48 年まで醒井郵便局として使用されていた建物です。大正４年に創建され、昭和９年に外壁や内部の間取り等が変更されています。

旧醒井宿問屋場

宿場で問屋を営んでいた川口家住宅の一部。通行する大名や役人に人足や馬を提供したり、荷物の積み替えなどを行っていました。完全な形で現存する問屋場は全国的に見ても珍しく貴重な建物です。

◆開館時間／午前９時～午後５時　◆休館日／月曜日（祝日の場合は開館）、祝日の翌日、12 月 27 日～翌年１月５日　◆入館料／大人 200 円、小中学生 100 円　◆TEL ／ 0749-54-2163

問合せ先：日本遺産米原地域協議会事務局　米原市経済環境部　商工観光課　TEL 0749-58-2227
米原市教育委員会事務局　歴史文化財保護課　TEL 0749-55-4552

琵琶湖とその水辺景観 ― 祈りと暮らしの水遺産

JAPAN HERITAGE SHIGA・BIWAKO

米原市　構成文化財③

醒井宿

日本には世界に誇る「たから」がたくさんあります。文化庁は、この歴史的魅力にあふれる地域の「たから」たちをさらに磨き上げるべく、我が国の文化・伝統を語るストーリーを「日本遺産」に認定し、国内に、そして世界に発信していく事業を支援しています。

滋賀県と大津市・彦根市・近江八幡市・高島市・東近江市・米原市・長浜市が申請した「琵琶湖とその水辺景観―祈りと暮らしの水遺産」は、平成 27 年に文化庁から「日本遺産」として認定されました。

日本遺産を構成する文化財として、米原市からは「伊吹山西麓地域」、「東草野の山村景観」、「醒井宿」および「朝日豊年太鼓踊および伊吹山麓の太鼓踊と奉納神社」の４つが選ばれています。

「三水四石」の宿場町・醒井

～霊仙山からの良質な水が湧き出る名所～

醒井宿は、中山道六十九次のうちの六十一番目の宿場。旧街道に沿って地蔵川が流れ、かつて両側に宿場を構成する様々な施設が立ち並んでいました。湧水や地蔵川、並木がつくり出す美しい町並みは、江戸時代末期の絵図にも描かれており当時の宿場の面影を現在まで伝えています。「古事記」、「日本書紀」で語られるように、伊吹山の神に痛めつけられた日本武尊がこの地の水で正気を取り戻したとされ、醒井という地名の由来になったといわれています。

加茂神社

加茂神社は、醒井集落の東端近くの岩盤上に鎮座しています。祭神は加茂別雷命で、神社名と同じく、京都の加茂社と同じ祭神です。「加茂」の名は、水の神を祭る神社に多く見られる社名でもあります。神社が鎮座する岩盤の下のあちこちから、鈴鹿山系霊仙山を源流とする水が湧き出ており、これを「居醒の清水」と呼んでいます。

十王水

十王水は地蔵川の中程、左岸の山の端から湧き出る水で、「浄蔵結縁の水」とも呼ばれます。浄蔵は平安時代中期の天台宗の高僧です。平将門が関東で乱を起こすと、その調伏のための修法を行い霊験がありました。この地で岩石の下をくぼめたところ、清水がこんこんと湧き出したとの伝承があります。後世その近傍に十王堂があったことによって十王水と呼ばれるようになりました。

西行水と泡子塚

西行水は地蔵川左岸の山肌から湧き出る水で、「仲算結縁の水」とも呼ばれます。仲算は平安時代中期の法相宗の高僧です。延喜年間、仲算一行が東国への旅の途中に醒井を通り、懐から短剣を取り出し、呪文を唱えて岩石の端を切り落としたところ清水が湧き出したとの伝承があります。多くの高僧が醒井を通り、水を介して霊仙の神仏と縁を結びました。

また、このような逸話もあります。昔、西行法師がこの地を訪れた際、茶屋の娘が西行に恋心を抱き、西行の飲み残した茶の泡を飲んだところ懐妊し、男子を出産しました。後年、西行が再びこの地を訪れたときに自分の子であることを告げられます。西行が「我が子なら元の泡に戻れ。」と祈念すると、その子はたちまち泡になったという。子どもの霊を慰めるため石塔が安置されました。

三水四石と七湧水

三水四石とは、居醒の清水、十王水、西行水の醒井三水と、蟹石、腰掛石、鞍掛石、影向石の四石を指します。醒井三水に天神水（枝折）、いぼとり水（上丹生）、役の行者の斧割り水（上丹生）および鍾乳水（上丹生）を総称して「醒井七湧水」と呼ばれています。

居醒の清水

居醒の清水の由来は、日本書紀や古事記などの神話に記されています。日本武尊（古事記では倭建命）が東国征討の使命を終え、大和へ帰る途中、伊吹の荒ぶる神を討ち取るため山へ向かいました。そこに伊吹山の神の化身の大蛇（古事記では白い猪）が道を遮ります。武尊はこれを神の使者と見誤り、「使者に用はない。」と蔑み、無視して通り過ぎました。怒った伊吹の神は氷雨を降らせ、霧をかけて谷を曇らせ、武尊を痛めつけます。意識朦朧のまま下山し清水の湧くところで水を飲んで正気を取り戻します。この清水を日本書紀では「居醒ノ泉」、古事記では「居寤清水」と名付けられたと記されています。なお、病身となった武尊は、その後、能褒野の地（現三重県亀山市）で亡くなっています。

名神高速道路
加茂神社
日本武尊像
蟹石
居醒の清水
鞍掛石
腰掛石
地蔵堂（市指定文化財）
石造地蔵菩薩坐像
醒井木彫美術館
醒井公会堂（国登録文化財）
中山道
醒井宿資料館 旧問屋場（市指定文化財）
地蔵川
十王水
西行水
法善寺
了徳寺（国天然記念物）
オハツキイチョウ
大正通
醒井宿資料館 旧醒井郵便局（国登録文化財）
松尾寺政所
醒井養鱒場
醒ケ井駅前
国道21号
P
醒井水の宿駅
JR醒ケ井駅
至大垣
JR東海道本線
至米原